

# ふくりゆう

発行所 日本下水文化研究会運営委員会  
 発行責任者 谷口尚弘(運営委員会副代表)  
 発行年月日 平成8年9月15日  
 印刷所 (株)愛甲社  
 編集 小松建司 新澤紀明  
 夏号(通巻5号)

## もよおし

### パネルディスカッション“大地震と人々の暮らし”

日本下水文化研究会主催の「地震に関するシンポジウム」が八月四日、小平市の『津田塾大学5101教室』で開催されました。参加者は、「真夏の日曜日」が悪かったのか……、事前のPRが足りなかったのか……、当初の見込みとは期待外れで津田塾大学の教室も人影まばらでさみしかったです。

前置きはこれくらいにして、シンポジウムは、「スライドによる震災紹介」「パネルディスカッション」「ふれあい下水道館の写真展等の見学」という内容の三部構成で行われました。

パネラーには日本生活協同組合連合会常務理事の布藤明良さん・東京都総務局震災対策担当参事の伊藤章雄さん・墨田区地域振興部環境対策課主査の村瀬誠さん・大阪経済大学教授、日本下水文化研究会代表の稲場紀久雄さんとコーディネータとして東京都流域下水道本部技術部長の谷口尚弘さんを迎えました。ディスカッションを聴かせていただいて、今までの地震に関する常識や知識が甘かった事を痛感しました。日ごろの備えは、どうしなければいけないのか、またいざという時の対応などどうすればよいのか。大地震に備えて必要なことは何か、生活者の視点から見た貴重な内容のディスカッションでした。(やま)

### 写真展『三大地震と人々の暮らし』を

◇◇小平市「ふれあい下水道館」で開催中◇◇  
 ◇平成8年7月17日から平成8年10月16日まで◇

明治24年10月28日に発生した濃尾大地震を自ら調査しながら、バルトンたちが被災地の様子を撮影していました。

その写真集『日本の大地震1891』のなかで、バルトンはこう言っています。

『母なる大地の内部深く、密かに次なる異変が起こっているかもしれないのだが、人々のなかにあの通例の無関心が戻ってくる』

その後の、大正12年9月1日に発生した関東大震災、平成7年1月17日に発生した阪神・淡路大震災の被災状況を撮影した写真を見ると、人々は震災後と同じように悲惨な生活をさせられていることがわかります。

阪神・淡路大震災から、1年半しか過ぎていないのに、私たちのなかにバルトンの言う「無関心」が戻ってきてはいはしないでしょうか。

小平市と日本下水文化研究会は「地震が人々の暮らしにどのような影響を与えたのか」をテーマに写真展『三大地震と人々の暮らし』を開催しました。(栗)



## 96バルトン忌

—スクリバ医師の墓碑も青山に—

8月5日の猛暑のなか「96バルトン忌」を行いました。まず最初に横浜水道の貢献者パーマーの墓参。恒例により渡辺健氏のユーモアをまじえてパーマー氏についての説明がありました。そのパーマー氏の墓碑のすぐ近くにスクリバ医師の墓碑があるのを稲場氏が「バルトン忌」の始まる前に見つけられていました。

「スクリバ医師」は、今回日本下水文化研究会が発行した写真集『三大地震と人々の暮らし』の写真No.14「帝大医学校の仮設病院」にも写っているドイツから来られた医師です。後に日本に帰化されたようで、墓碑の前の石台には「須栗場」と漢字が彫られていました。

一行は、バルトンと、スクリバ医師と、写真集との不思議なつながりの話に夢中だったのと、うだるような猛暑のなかを歩いていたのとで、芳川顕正氏の墓参を終えたとき、長与専斉氏と後藤新平氏の墓地をうっかり通り過ぎて来たことに気がつき、今年は二氏の墓参を失礼しました。

バルトン氏の墓碑を、毎年、山梨県小菅村から寄贈される「多摩川源流水」で清め、今回発行した写真集を供え、参会者一同で献花しました。墓参後に近くのレストランで昼食会を行いました。昼食をとりながらの歓談では、皆さんそれぞれが、話題が豊富で、しかも楽しい話ばかりですので、あっという間に時間が経ってしまいました。(く)





## 最近思っていること

(株) 日水コン 酒井 彰

6月にカナダ・合衆国へ訪問する機会がありました。その見聞録をまとめてみようと思いましたが、頂いてきた資料も少なくなく、私にはこの会報の能力にまどわるように簡潔に述べる能力は備わっていないので、まずは、環境問題に対する行政、とくに下水道分野の取組み方の日本との相違点として、感したことをあげさせていただきます。以下にあげているのは、Massachusetts Water Resources Research (MWRA) という上水供給から、下水道、水域の水質管理までを行っている組織でのレクチャーからとくに重要と思われたことがらです。

\* NPOと大学が共働して研究し、その成果を行政も活用している。(モニタリングデータなどは相互に補完あっている。)

\* 環境教育カリキュラムを作成するセクションがあり、さらに小学校でのモデル授業や先生への研修まで自ら行っている。

\* 刊行物が専門家、関係者だけでなく、かればいいというスタンスではなく、実施しようとしている事業を納税者である住民に伝えることに重点を置いている。

\* 何か新しい事業をはじめようとする場合、住民の理解を得ること、必要に応じた組織再編を行うことを先行させようとしている。

\* 市民が接する場(水族館、ハーバークルーズ)でMWRAの名前を見たり聞いたりする。水族館では、リアルタイムでボストン湾の水質データを見ることができる。

これと比べると、我が国では、これからの環境問題の解決のためには新規事業が必要と言いながら、住民参加といっても行政主導、PRも決まったことの上で承を求めているに過ぎず、新規施策も元の体制で行おうとしていることなどが、相違点として浮かんできます。

カナダへは、ケベック市で行われた雨天時汚濁に関する特別会議に出席したのですが、環境教育、住民との共働等は、半日をかけたDiscussionのテーマにもなっていました。計画の内容として興味深いのは、日本と違って合流式下水道の越流水が水域へ与える影響、例えば海水浴場の閉鎖を軽減するために、改善の目標を水域条件に応じて決めていることでした。日本ではこの種の問題を下水道のなかだけの問題として、越流

水が放流される水域条件にかかわらず、下水道サイドの条件だけで決められる「分流式並」や「汚水量の3倍遮集」ばかりを目標としている限り、「合流改善」が市民や財政局から理解されることは用意でないように思われました。重大な問題ならどれぐらい重大かを具体的に示し、事業でどう改善されるのかを示すことが必要になってくると思います。言うは易しですが、私自身も仕事としてこの問題にかかわってきた手前、大いに反省しなければと思っています。

PRに関しまして、帰国後私が去年の「第3回下水文化研究発表会」に投稿した「水に関する市民意識と下水道のイメージアップ」という論文を、下水道協会誌9月号で特集企画されている「市民アンケートに見るこれからの下水道」のなかで「報文」として掲載したい旨お話がありました。

この論文に述べているテーマについては少し思い出があります。あるとき、「下水道のイメージアップ方策は？」と聞いた仕事をしていた、下水文化研究会の情報を十分活用し、「見える下水道」を強調し、下水道整備後の住民の関心離れを避けることの大切さを指摘し、さらに(これはややトーンを弱めたのですが)住民が家庭で使う危険物・有害物の情報を提供することなども提案し、何の不足もないでさええとやや自負していたにもかかわらず、「2年間やって成果はこれだけですか?」と言われたことがあります。愚痴を言わせてもらえば、下水道に対する意識の現状を把握するためのアンケート調査を含めても、我が社の一人当たりノルマの1/10位にしかならない契約金しか頂いていないのに。

ここに、日本の行政のひとつの典型を見ることができそうな気がします。すなわち、行政のしていることはあくまで正しいのだけれど、これをうまく住民に伝えられないから、その部分をコンサルタントや民間に委託し、そして見栄えのよいパンフレットやキャッチコピーを求めているようです。でもこれで、PR (Public Relationship) と言えるのでしょうか。一市民として、公共事業一般を眺めてみますと、民意を反映した事業、社会的要請に基づいた事業と言われているけれども、行政自らが作り出した民意や社会的要請ではないのかという気がします。これでは、

「イメージアップ」も住民の支持もなかなか得られないと思います。

これから重要なことは、住民の協力すなわち住民の役割もはつきりさせてそれを求めていかなければ環境は守れないと言う認識だと思っています。いくら立派な施設を造っても行政だけに全てを任せないですむという時代ではもう無いのです。つまり、住民も主役になっていかなければならないと言うことですから、行政の方で事業の進め方や住民との係わり方を変えないままで、住民の支持を得ていこうという考えは改めていかなければならないと思います。言い換えれば、下水道のイメージアップに一番必要なことは行政が変わることなのです。住民ばかりが「教育」されるのではなく、下水道に携わる我々にもまた環境教育がもっとも必要になってくるのだと思います。

後でうかがったところによれば、「月刊下水道」でも9月号に「広報」の特集が生まれ、谷口運営委員長が先年刊行した環境教育教材「くらしと水と下水道」に関連して、執筆依頼を受けているとのこと。谷口さんと私を同列に並べるのは恐縮ですが、このような原稿依頼は、下水文化研究会が下水道の広報、下水道を教材とした環境教育の分野においてまさにオビニオンリーダーであることが広く認められていることを示すものといってもよいと思われます。

さらに、下水道協会誌7月号を見れば、住宅・都市整備公団の松下氏、山口氏が同じく第3回研究発表会に投稿された論文が特別企画「水循環システムの再生」のなかでそのまま掲載されています。しかも、その特集のなかで一番光っていたと思います。他にも優れた論文が少なくない下水文化研究発表会講演集は、もう下水道協会誌を先取りしていると言ったら言い過ぎになるでしょうか。

ここで思いつきなのですが、「地震」、「環境教育」、「水循環」(私の思いつくテーマだけではありません。)などをテーマとした論文集を本研究会で企画することもできるのではないかと思います。思いつきついでに、いつか近い将来、海外の環境教育実践の現場等を視察するツアーなんかも企画できたら、夢があつていいと思うのですが。





**96年度  
第一回定例研究会  
実施される**

第一回定例研究会が5月10日(金)に東京南新宿ビルで開催されました。講師は、梅沢昭仁氏(三機工業(株))で「南極・昭和基地の人と環境」という演題で2時間にわたり珍しい南極のスライドを交えてお話していただきました。

**ルポ・運営委員会**

第一回(5/31)及び、第2回(7/5)の運営委員会が某所で開催された。議題は、小平の「ふれあい下水道館」で行う写真展、三大地震の写真集の発行、地震シンポジウムの開催等についての細かい詰め等である。

写真展の当会担当は、栗田委員と小松委員が当たることとなり、写真集は小松委員が編集することとなった。地震シンポジウムは谷口副代表が講師等の手配を行うこととなった。

今回は、運営に私小松も参加しているが、実際におこなってみると、その大変さがとてもよく実感できた。運営員の皆様大変ご苦勞様です。

記 小松

**写真集の反応** 続々と寄せられる

明治(1891年) 濃尾  
大正(1923年) 関東  
現代(1995年) 阪神・淡路



**3大地震の記録写真集出版**

日本下水道文化研究会が、三大地震(明治1891年濃尾地震、大正1923年関東大震災、平成1995年阪神・淡路大震災)の記録写真集を出版した。写真集は、被災地の惨状や被災者の生活実態を伝える貴重な資料として、被災地や関係機関等に寄贈される。

濃尾の貴重な写真も復刻

▲ 神戸新聞 8・24

▼朝日新聞 8・9 名古屋本社板

**写真を通して「震災の教訓」**

震災教訓も教訓出版

「写真を通して震災の教訓」は、日本下水道文化研究会が、三大地震(明治1891年濃尾地震、大正1923年関東大震災、平成1995年阪神・淡路大震災)の記録写真集を出版した。写真集は、被災地の惨状や被災者の生活実態を伝える貴重な資料として、被災地や関係機関等に寄贈される。

▲ 京都新聞 8・18

**読書**

三大地震と人々の暮ら

「三大地震と人々の暮らし」は、日本下水道文化研究会が、三大地震(明治1891年濃尾地震、大正1923年関東大震災、平成1995年阪神・淡路大震災)の記録写真集を出版した。写真集は、被災地の惨状や被災者の生活実態を伝える貴重な資料として、被災地や関係機関等に寄贈される。

**お便りより** 「地震」の写真集拝受。りっぱな仕事に敬服致します。

私の母は12~3歳の頃関東大震災を経験した筈です。あまりそのことについて話したのを知りません。よほど辛かったのかと想像しています。一度だけ、弟たち(私には叔父に当たる)をつれて目黒(江東区から)の親戚に避難したと、聞いたことがあります。子どもながら長女として責任も持たなくてはならなかったのでしょうか。

いろいろもつと聞いておけば良かったと、母を思い出しております。

(K生)

▲ 日本水道新聞

**三大地震と人々の暮らし**

濃尾、関東、阪神・淡路大震災

～日本下水道文化研究会～

バルトンの震災写真所収

「三大地震と人々の暮らし」は、日本下水道文化研究会が、三大地震(明治1891年濃尾地震、大正1923年関東大震災、平成1995年阪神・淡路大震災)の記録写真集を出版した。写真集は、被災地の惨状や被災者の生活実態を伝える貴重な資料として、被災地や関係機関等に寄贈される。

《写真集》三大地震と人々の暮し

日本下水道文化研究会が設立5周年を記念して企画制作した。三大地震とは濃尾地震(1891)、関東大震災(1923)、阪神・淡路大震災(1995)である。

下水と地震がどう結び付くのか。実は意外な接点がある。わが国衛生工学の父、あのW・K・バルトンは日本の大地震「Great Earthquake of Japan」の編集者のうちの一人なのだ。地震の翌日から自らが撮影したその写真に感想を付けている。バルトンの曾孫、鳥海幸子さんが同書を日本下水道文化研究会にもたらしたことからこの写真集が生まれたのだろう。

納められた写真は、濃尾地震は同書、関東大震災は東京都墨田区立立緑図書館、阪神・淡路大震災は日本水道新聞社と日本イレ協会・渡辺健氏(日本下水道文化研究会)の提供による貴重な写真集である。明治・大正・平成の経験や教訓をこれからの危機管理に生かす必要を感じる。

実費2300円(送料込み)で頒布。問い合わせ先佐野廣一(日本上下水道設計 ☎03・5269・9919) 月刊「水」10月号より



マスコミ情報

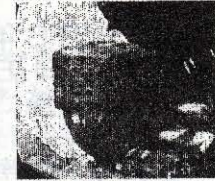
万葉人 秘宝 トイレ使い分け



「万葉集」に記述された「くもがいに」は、古くは「くもがいに」として呼ばれていた。これは、屋根がくも（雲）の形をしたトイレのことである。...



奈良・藤原宮跡 セットで出土 階層の違い  
このトイレは、藤原宮跡の出土品である。現代のトイレセットと比べて、構造が非常に単純で、水を流す仕組みが異なる。...

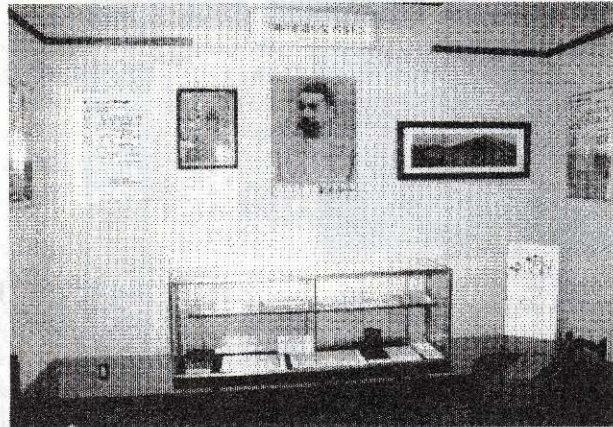


最古の下水道発見  
180年着工の英国式

「最古の下水道発見」という見出しで、180年着工の英国式下水道が紹介されている。これは、ロンドンで発見されたもので、非常に古く、かつ先進的な技術であったとされている。...

下関市水道局：水道資料室にバルトン・コーナー

下関市の水道は明治39年（1906）給水開始、全国9番目の歴史と伝統を誇っている。今年には90周年に当たり、同市水道局は各種の記念事業を展開している。その一環として6月水道資料室がオープンしたが、特にバルトン・コーナーが市民の注目を集めた。バルトンは、明治24年（1891）12月内務省の依頼で下関市を踏査し、水道計画の骨格をまとめると共に水道水源地を選定した。現在の内日第1貯水池地点がそれである。下関水道の原形は、バルトンが描いたのである。実施計画は5年後の明治29年。工事着手は、財政困難から明治34年と遅れ、それから更に5年後、ようやく給水開始にこぎつけた。実に給水開始までに15年かかったわけである。同市水道局では、このような経緯を踏まえ、バルトンを「下関水道の父」と位置付けており、バルトン・コーナーの特設に力を入れた。このため担当職員を京都市在住のバルトンの曾孫鳥海幸子さんの元に派遣するなど、資料収集に努めた。この過程でバルトンの近代水道技術の著書「Water Supply of Town」の中に下関水道の記述があることも分かり、バルトンの地域性第一主義の姿勢が改めて関係者の感動を呼び、尊敬の念を新たにさせた。おな、同市水道局の資料収集作業に本研究会も協力した。（8月2日、蓼倉虫a 記）  
写真：下関市水道資料室「バルトン・コーナー」



ふくりゅうでは原稿募集をしています  
どんなに小さいことでも結構です。身近な話題を送って下さい。  
〒267 千葉市緑区土気町1580-66  
小松建司まで

会員情報

春の叙勲受賞

ニュースとして遅くなりましたが、春の叙勲で、松木喜久郎氏が勲三等瑞宝章、古澤次男氏が勲四等瑞宝章を受章されました。

村瀬誠氏が、雨水対策で薬学博士号を取得

14年にわたる雨水利用推進活動の成果をまとめた論文が「社会科学」にて優れた業績を上げた」と評価され薬学博士号を取得しました。また、「環境シグナル」（北斗出版）という本を書き、今話題になっています。（編集員である私も読んでみましたが、私の頭では発想もしないだろうことをやり抜いていることがよくわかりました。）

お詫びと訂正

ふくりゅう4号、神吉先生の記事の中で、「配水管」とあるのは「排水管」の間違いでした。ここで訂正し、お詫び申し上げます。

下水道文化第8号P81の11行目「流域下水道管を直接見られる」の記述の「流域」は削除して下さい。

編集後記

夏号が秋になって発行という事態になってしまった。写真集「三大地震と人々の暮らし」の編集を一手に引き受けた結果、他に手が回らなくなってしまったのです。写真集の発行までの時間がとても短かったため、夜も眠れない日が続きました（これは嘘でなくホント）。又、会員の皆様の住所等の管理も引き受けてしまい、その整理にも時間がかかってしまいました。遅れたお詫びにならないお詫び！（建）